
月夜に踊れ

アヤタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜に踊れ

【Zコード】

Z0732R

【作者名】

アヤタカ

【あらすじ】

10年前の小学校2年の一ヶ月の記憶が御堂^{みどう} 紗鷺^{あやたか}にはない。
大事な何かを約束したような気がするのに。

あれから10年普通に過ごしていた俺は幸せだったのだろうか?
「やあ、とんでもない所に巻き込まれてしまったみたいだね」

黒い服の女との出会い俺の世界の現実を変えていく。

過去の出会いと新しい出会いが絡まり記憶が紐解かれる時、人の欲望と災いは街を狂わせて行く。

俺は何の為に力を求め、何の為に力を振るうのだろうか。

ヴァンパイアと不老不死を求める者達の戦い。

プロローグ 記憶喪失の過去

「プロローグ」

月が輝く真夏の深夜。

絶対に近づいてはいけないと言われている山の斜面に埋められる
ようにして建てられている祠。

張り巡らされた御札がその異質な存在を際立たせる。

神社と異なり鳥居も存在しない祠。

いつものように観音開きの戸を開けると古い仏像が出迎える。
その仏像を誰も回りにいないことを確認するとゆっくりと横にす
らす。

仏像に隠れるようにしてその背後に存在する子供が何とか入れる
だけの大きさの穴。

その穴をゆっくりと進んだ先に現れる隠された石室。

青白い石室の部屋の奥、和の封印に不釣合いな祭壇と黒い棺。
その黒い棺の前に立つと少年は歌を歌つた。

学校で習つたばかりの歌。

『ほう・・・いい歌だ。』

誰も居ないはずの部屋に声がする。

「まだ全部は覚えていないんだけどね。聞かせてあげたくて」

この場所を発見してから一ヶ月、毎日のように会いに来る少年を
女は複雑な気持ちで毎回迎えていたのだが少年には知る由もない。

『初めて来た時は怯えていたくせに、いつの間にか毎日来るよう
になるとは。』

ため息がつけるものならば盛大なため息をついてみせたであろう。

「でも、おばさん優しいし。」

『だ・れ・が・おばさんだ!』

少年は耳を塞ぐ。

『無駄だ。直接脳に語りかけているからな。反省しな。』

「でも、ずっとここの中にはいるんでしょう？」

コンコンッと棺を叩く。

『……まあ確かに長くいるが。』

女はむうと唸ると沈黙する。

声の主は黒い棺から声を出していいるらしい。

この祠が立てられたのは少年の調べではペリー来航以降の1860年頃

だということなので150年は経っているだろう。

いつからこの場所ができたのかは文献も残っていないければ誰に聞いても知らないとの事。ただ今年の春この山がどうなるかは少年は知っていた。

少年はまたコンコンッと棺を叩く。

「開けちゃダメなのかな・・・」

『開けるな。私はあと100年は寝ていたいのだ。それに封印されていてるという事はほんくでもないのが中に入っているということだ。災いは世に出すべきではない。』

「変なの。自分のことなの?』

少年は棺の上に座る。

『お前・・・どこに座っている。』

「・・・ダメ?』

『・・・・・勝手にしろ。』

「うん。』

嬉しそうに少年は言ひがいつもより声のトーンが低い。

『どうしたんだ? 元気がないじゃないか。』

少年は少し戸惑つた。

言ひべきか言わないべきか。

そして、決断する。

「僕、皆を守れるヒーローになりたいんだ。それをクラスの皆さんにそう言つたら・・・」

『ブフツ! ・・・ ブフフフフフ・・・』

少年は予想通りの反応に顔を膨らませ棺から下りると棺に張られているお札を爪で剥がし始める。

『まつ、待て・・・私が悪かつた！！謝るから・・・くへッひーひ
つひつわははははは』

ベリッ！！

少年は棺に張られている御札の一枚を思い切り破り取る。

『くくく・・・すまんすまん・・・どんなことかと思えば実に少
年らしい悩みではないか。』

「むー」

ベリッ！

『ちよつと待て！またビリッて言つたぞ！今！』

「気のせいだよ。」

ベリッ！

『・・・ちなみに封印はあといくつだ？』

「えつ？あと一枚だよ？縦に一枚と横に一枚と上によつてあつた
から。」

ベリッ！！

言いながら四枚目のお札を剥がす。残るは最後の一枚にして他とは違ひ赤い文字で何かを書かれている御札。

『冷静になれ少年、これはお前の為だ。』

最後の一枚をこの話の流れの中で剥がしてしまおうと考えていた少年の動きがピタリと止まる。

それだけ今聞こえた声が冷たく、重く、本気であったのだ。

『男の夢を笑つた事については私に非がある。当然少年と言えども男だ。プライドを傷つけてしまったことについて謝らせてもらひや。だが最後の一枚を剥がすのだけは辞めておけ。』

少年はそれでも最後の一枚の御札に手をかける。

「僕はヒーローになりたいんだ。おばさんは僕の友達だよね？」

『恋人になら剥がされてもいいが、友達にはダメだ。ということ
で諦める。』

「ならば、恋人になるよ。だから『メン』ね。」

『バカッ 辞めろッ！..』

ビリッ！！

最後の一枚を剥がす。

「開けるよ？」

『私は非常に機嫌が悪いのだが・・・自分で出る。お前は後ろを向いていろ。その間に話せ、理由しだいではいくら友達とこえどお前を殺さねばならん。』

「友達と思つてはくれていたんだ・・・よかつた。」

少年はゆづくつと事情を話す。

春に山が切り崩される事。この祠だけでなく、山の上にある神社さえも壊されマンションやら住宅地にされる事。

ゴトーンッ

少年の背後で音がする。

ペタリ・・ペタリ・・

裸足で歩く音が近づき真後ろのあたりでピタリと止まる。

「なるほどな・・私を救う為に私の意志を無視してまで助けようとした訳だな。」

初めて聞く生の声にドキリしながらも、その凜とした声に引き込まれる。五感の全ての意識を耳に集中させられていふような感覚を少年はこの時感じていた。

「納得はしないが理解はした。頭にきているが、気持ちは嬉しい。それで、どうしたものか。」

プロローグ 記憶喪失の過去（後書き）

「ここにちわ。中々と仕事に追われ書けない日々を過ごしている休み
関係なく仕事携帯に生活を縛られていますがゆっくりと書いてい
けばと思つております。

ご指摘など色々あれば気軽にお願ひします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0732r/>

月夜に踊れ

2011年10月7日05時22分発行